

# 2025 年度 6 月 第 3 回学生定例会議

1. 日時 : 2025. 06. 24 (Tue) 16:30 ~ 18:00
2. 場所 : 青葉サイエンスホール
3. 議事 :

SyDE 生全体に向けて実施した事前アンケートから、SyDE の活動を通じた異分野融合教育とコミュニケーション能力の向上を期待する学生が多いことが明らかになったことを受けて、SyDE 生同士がお互いをより良く知り、お互いの研究分野について交流することを目的とした『自己紹介&仮想共同研究マッチングゲーム』(以下、マッチングゲーム)を実施した。

マッチングゲームを実施するにあたり、SyDE 生には事前のアンケートへの回答および自己紹介カードの作成を依頼した。アンケートは SyDE4 期生であり、SyDE 生の有志で結成したグループである HagiiZ メンバーの宮岸太一さんが作製したものであり、アンケートへの回答を通して、学生が SyDE に期待する「異分野融合」の形態を明確化するとともに、学生が SyDE の活動で向上を期待する「コミュニケーション能力」を具体化することを目指したものであった。

アンケートの中では、学生それぞれの研究分野のキーワードや業績、学生が過去に執筆した論文について記入してもらい、それぞれの研究領域を明確化することを目指した。また、「SyDE 生同士による異分野融合の形」として、学生それぞれが考える異分野融合の形態(共同研究の実施や学際融合による新領域の創出など)を回答してもらった。さらに「コミュニケーション能力」として、学生それぞれが重視するコミュニケーション能力の在り方(異分野の文脈を理解・伝達する力やファシリテーションスキルなど)について回答してもらった。

自己紹介カードは、SyDE6 期生であり、宮岸さんと同じく HagiiZ に所属する鈴木志門さんを中心として、SyDE6 期生の方々にデザインしていただいたものであり、それに学生各自が事項を書き込むことで作成してもらった。自己紹介カードにはそれぞれの顔写真を入れてもらうだけでなく、研究の概要、さらに生活スタイルや趣味についても記入してもらう欄を設け、学生同士が様々な切り口からお互いを知ることができるような工夫がなされた(図 1)。

このような事前準備の元で、当日はマッチングゲームを実施した。マッチングゲームでは、まず学生は自己紹介カードを用いて、自身に関する基本情報について交換し合い、その後それぞれの研究概要について伝え合っ



さいとう としき  
**斎藤 隼輝** D2  
4th

toshiki.saito.g7@dc.tohoku.ac.jp  
工学研究科量子エネルギー工学専攻・片平キャンパス

Birth day 2000/02/22 Home town 福島県福島市

Favorite music 中田ヤスタカ, TAKU INOUE Disliked foods なし

Hobby ドライブ, 釣り, 読書, 音楽鑑賞

SNS Twitter, Instagram, Facebook, LinkedIn, LINE

Moments of happiness 車を運転しているとき

How to spend time outside of research ドライブ, 読書, 音楽鑑賞など

Sleep schedule From 1:00 a.m. to 09:00 a.m.

Qualification 実用英語技能検定1級, 普通自動車免許 (MT)

Academic membership 日本金属学会, プラズマ・核融合学会, 日本原子力学会

< Research title >  
強度と熱伝導性、耐照射性に優れた銅合金の開発

< Keyword >  
酸化物分散強化、メカニカルアロイイング、TEM、微細組織

< Free space >

私の研究する酸化物分散強化銅合金は、銅の中に微細な酸化物粒子を分散させることで強度向上を図った材料です。  
酸化物粒子と銅母相界面のつなぎ構造が、酸化物粒子の分散性や材料強度に影響するという仮説を要証すべく、研究を進めています。

図 1 自己紹介カード

た。互いの研究概要から、共通するキーワードを見つけたり、お互いの研究分野で共通して用いる手法を見出したりして、お互いの研究を融合させる方策を模索した（マッチングゲームの概要：図2）。



図2 自己紹介&仮想共同研究マッチングゲームのコンセプト

学生からは、マッチングゲームを通して、お互いの研究内容とその意義、そして興味深い部分など、普段知らなかった部分について理解を深めることができたといった意見や、普段の自分の生活では気づくことのできない社会課題が存在することを知ることができたという意見、異なる分野の研究でも手法に注目すると共通する部分もあるといった意見が上がった。一方で、自身の研究について、定例会合の限られた時間内では極めて表層的な部分しか相手に伝えられず、お互いに十分研究について理解できないといった意見や、文系と理系では研究の進むスピードが異なり、研究分野を融合させることは難しいのではないか、といった意見も聞かれた。